



蘭學事始
上

洋学文庫
文庫8
C 223
1



富田圖書

鳥齋杉田朱生肖像



大漁實
印

明治二年己巳新刻

蘭學事始

天真樓藏版

天真樓藏版印

11 57011

先生名ハ翼字ハ子鳳俗稱ハ玄白一ニ九幸ト號ス父ハ甫仙ト云若州侯ノ醫貞ニシテ母ハ蓬田玄孝ノ女ナリ先生誕レシ時其母難産ニテ分娩ノ後終ニ絶命ニ及リ傍人皆産婦ノ暈倒ヲ救ハムトテ初生兒ノ事ニ及ハズ且難産ニテ分娩セル兒ナレハ定メテ死セル者ナラントテ布片ニ包ミ之ヲ蓐側ニ置ケリ然シテ後之ヲ顧ルニ全命ナリ且男兒ナリケレバ人々再ヒ愁眉ヲ開キ乳哺養育シテ漸ク成長ニ至レリ甫メ十七八歳ノ時牛山若州郎内父ノ膝下ニ在リテ之ニ告テ曰ク不肖男此齒ニ至ルマテ疎慢ニ日ヲ消セリ

願クハ今ヨリ新ニ良師ヲ求メ本業ヲ習學セント大人欣然トシテ曰ク余汝カ其言ノ出ツルヲ待テリト此ニ於テ當時二本榎ニ住セル官醫西玄哲ト云ヘル人外科ニ名アリケレハ乃チ其門ニ入り從學シ日々怠慢ナク風雨ヲ厭ハズシテ遠路ヲ往來セリ又本郷ニ俗稱宮瀬三郎右衛門ト云テ龍門先生ト號セル儒人アリ乃チ其人ニ從ヒテ經史ヲ學ヒ之ヲ研精セリ二十五歳ニシテ侯ヨリ部屋住料五人口ヲ賜リケレハ此時大人ニ乞フテ外宅セリ且月俸五人口ヲ以テ父ノ給ヲ待ツヘカラスト約シ遂ニ願文ヲ呈シ許允

ヲ得テ日本橋通四丁目ニ偶居セリ画工楠本雲溪ノ
鄰家ナリシト云爾後箔屋町堀留町等ニ轉居セリ是
レ火災ニ遭ヒシカ故ナリト云三十七歳ノ時父甫仙
君没シ給ヒケレバ此時ヨリ新大橋ノ中邸ニ住居シ
テ蘭學創始ノ舉アリ四十四歳ニテ再濱町竹本藤兵
衛ト云士人ノ地ヲ借り之ニ外宅セリ是ヨリ家學ヲ
全備セシメントシ奕世傳來ノ和蘭瘍科ト唱フル書
ヲ檢點スルニ何モ彼邦人ヨリ譯官ヲ以テ聞出セル
者ノミニシテ取ルニ足ズ又漢土ノ外科書ヲ遍ク涉
獵スルニ疎漏ニシテ何レニ適從センコトヲ知ラス

是ニ因テ新ニ日本一派ノ外科ヲ創建セント思惟シ
漢土ノ書籍中外科ニ係ル確言要語ヲ逐一撰集セン
トヲ同藩ノ一奇士青野小左衛門ト云人ニ語リケレ
バ士其本業ニ切ナルヲ感賞シテ其撰書今如何程成
レリヤト問フ否未タ其草ヲ起サス唯志ヲ發セシ迄
ナリト云ヒシニ士大ニ之ヲ勵マシテ曰ク足下既ニ
斯ル大業ヲ起サントシ何ヲ以テ猶豫シ給フヤ是レ
明日ヲ期スベキトニアラス宜シク今日ヨリ筆ヲ把
リ給ヘト其言ニ深ク服シテ即夜ヨリ業ヲ始メ瘍科
大成ト題セル書數卷ヲ撰集セリ其後和蘭原書内景

圖ヲ見テ臟腑筋脉ノ漢說ト大ニ異ナルヲ疑ヒ刑屍
ヲ解剖シテ之ヲ其圖ニ徵スルニ其吻合符節ヲ合ハ
スカ如キニ驚キ之ニ心服シ遂ニ憤然トシテ洋書翻
譯ノ業ニ從事シ此學ヲ首唱シ給ヒケレハ其名海外
ニ轟キ治ヲ請フ者門前ニ市ヲナシ晩年ニ及ンテ
台府ニ拜謁ヲ許サレ八十五歳ニシテ館ヲ捐テ給フ
右ハ盤水大槻先生ノ筆紀シ置レシヲ其マ、寫出
シテ以テ序文ニ代フ

明治二己巳年正月望 不肖曾孫杉田擴玄端謹識

蘭學事始序

是書ハ吾四世ノ祖鷓齋先生ノ遺編ナリ粵
ニ先生ノ時ヲ稽ルニ世ノ士君子耳目ノ及
ブ所未タ速カラズ縱ヒ博雅ノ人ト雖モ口
ヲ開キ譚スル所ハ惟唐竺ノミニシテ曾テ
泰西ニ渉ル者ナシ偶々一二之ニ渉ル者ア
ルトモ僅ニ常言瑣語ニ通シテ止ミ奧旨ヲ
發シ以テ實用ニ施スヲ聞カス先生英邁ノ
資ヲ以テ超然流俗ヲ抜キ二三子ト謀リ首

トシテ泰西ノ學ヲ唱一啗嘯ノ書ヲ繕キ專志研究實ニ畢生ノ全力ヲ盡セリ遂ニ前哲未曉ノ學ヲ啓シ千古未洩ノ竒ヲ闡シ二三子ト共ニ此學ノ鼻祖トハ為リニキ爾來諸名哲其緒ヲ繼キ學規漸ク拓ケ次テ近今泰西諸國本邦ト通好セシヨリ諸般ノ學科一時ニ勃興シ諸國ノ載籍所在アラサルハ無ク殆ト戸學人習ノ盛ニ至レリ嗚呼今ノ學ヲ為シ易キ此ノ如クナルモ溯リテ先生ノ

古ヲ見レハ彼ノコトク難キナリ抑天下ノ事皆ナ最勤苦ヲ歷ルノ後ニシテ始テ簡易ヲ得レハ今ノ學ヲ為シ易キ此ノ如キモ畢竟先生輩ノ賜ニアラスト云フヲ得ズ是書ハ只先生ノ漫筆ナレト古人苦心ノ一斑ヲ窺フベケレハ或ハ懦夫ノ志ヲ立テント思ヒ且祖先ノ功勞ヲ没セザルハ子孫ノ務メナリト思フテ茲ニ刊行シヌ

明治二己巳年孟春

四世孫杉田鶴廉卿謹撰

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '古今' and '蘭學'.



蘭學事始上之卷

今時世間は蘭學といふ事専ら行はれ志を立つる人ハ篤く学ひ無識なる者ハ湧りよこれを誇張す其初を顧み思ふは昔ハ翁ウ輩二三人不圖此業は志を興せし事なるがとや五十年は近し今頃ウ迄は至るへいじハ露思ハざりしは不思議も盛んとなりし事なり漢学ハ遣唐使といふものを異朝へ遣はされ或ハ英邁の僧侶などを渡され直に

彼國人は従ひ学ハせ帰朝の後貴賤上下へ教導の
為めよな〜給ひ〜事なれハ漸く盛んなり〜ハ尤
の事なり此蘭学ハ左様の事よも非ず然るよ〜ハ
成り行〜ハい〜と思ふよ夫醫家の事ハ其教へ
方摠て実よ就くを以て先よする事也〜却て領會
すること速クなるヨ又ハ事の新竒よ〜て異方妙
術も有ることこの様よ世人も覺居る故奸猾の徒こ
れを名よ〜て名を釣り利を射る為よ流布するも
のなる〜つらく古今の形勢を考るよ天正慶長の
頃西洋の人漸々我西鄙よ船を渡せ〜ハ陽よハ交

易陰よハ欲する所有てなる〜故よ其災起り〜
を國初以来甚と嚴禁な〜給へり〜見へ〜りこれ
世よ知る死なり其邪教の事ハ知らざる所の他事
なれハ論な〜但〜其頃の船よ衆来り〜醫者の傳
來を受とる外科の流法ハ世よ残るも有りこれ世
よ南蠻流とハ云ふなり其前後より阿蘭陀船ハ御
免有て肥前平戸へ船を寄せぬ異船御禁止よなり
〜頃も此國ハ其黨類よハ非よ次第ありて引續き
渡來を許され給へり夫より三十三ヶ年目よて長
崎出島の南蠻人を逐ひ拂されて其跡へ居を移せ

いよゝ夫より八年長崎の津に船を来す事とハ
 成りぬこれハ寛永十八年の事なるよゝ其後其船
 二随従し来る醫師も亦彼の外治の療法を傳へし
 者も多しとなり是を阿蘭陀流外科とハ稱する者
 り是れ固より横文字の書籍を讀て習ひ覺し事も
 も非ず只其手術を見習ひ其菜法を聞書留する迄
 有り尤もこなとよなき所の菜品多けれハ代菜ガ
 ちよてそ病者を取扱ひし事と知らる

一其頃西流と云ふ外科の一家出来たり此家ハ其初
 南蛮船の道詞西吉兵衛と云る者よて彼國の醫術

を傳へ人よ施せし其船の入津禁止せられて後
 又阿蘭陀通詞となり其國の醫術も傳り此南蛮阿
 蘭陀西流を相兼しして其西流と唱へしを世よハ
 西流と呼しし其頃ハ至て珍しき事よて有けれ
 ハ専ら行われ其名も高かりし也へし後よハ官
 醫よ召し出され改名して玄甫先生と申せしよ
 其男宗春と申されしハ多病よて早世し給ひ家絶
 へしとなり是れ我祖甫仙翁の師家なり其後召出
 されし今の玄哲君の祖父玄哲先生ハ玄甫先生の
 姪の續なりとなり右の玄甫先生初て西洋醫流を

唱へられしより 公儀も御用ひ遊されし事
 て阿蘭陀醫事御用立し始むり
 一又栗崎流といへるハ南蠻人の種子なりと云れハ
 南蠻邪宗の徒嚴禁となり其船の渡海も御禁制と
 なりされしも以前ハ平戸長崎の地は彼人々雜居
 し妻を持ち子も有りしが後々去れども吟味有て
 蠻人の種子の分ハ残らず此地を放流せられしが
 其中栗崎氏よし名ハ「ドウ」と云ふものハ彼地は成
 長くても其宗よし入らす其國の醫事を學ひしが
 邪宗よし入らざる詔を以て帰朝を許され召歸され

長崎へ歸りし後其術を以て大に行れ至て上手な
 りし人々栗崎流を稱せしよし名ハ「ドウ」と云ふ
 ハ蠻語露の事なるよし後よし文字を填めて道有と
 認りしを今の官醫栗崎君の祖なるや又別家の栗
 崎なるも詳なる事ハ知らざるなり吉田流橋林流
 名と云ふハ阿蘭陀通詞よて彼方法を學ひ一門戸
 を開きしなり
 一桂川家の事ハ今の代より五世の祖甫筑先生と申
 へハ文廟未と藩邸よおとせし時召出されし御
 外科なり其師家ハ平戸侯の醫師よて嵐山甫安と

申とるよりなり此甫安ハ其族より出島在館の阿
蘭外科ノ御託ノ置れて親ノノ學ハせ給ひノノ
リ此御家ハ平戸へ入津以来彼國の事ハ訣品有て
御親ノノ御自由なる事ノノ又其時代ハ今の如
くノノもなかりノノや甫筑君其頃幼若よて門人ニ
なり師ノノ附添て出島へ時々参られノノ専ら嵐山
の流法を傳へ給ひノノなり阿蘭陀の外科ハ「ア
子」ニ「アルマン」スノノいふ人ニきけり桂川もニハ
大和の國の人よて森島氏なりノノク嵐山の流を汲
むノノいふ意よて家苗を桂川ニ改め給ふニなり今

蘭外 四 本 蔵

の桂川君の御祖父甫三ニ申せノノハ翁若クノノ時
常ノノ交厚ナリノノ御人なりノノ故此事語り給へるを
聞置き侍りぬこれに世ニ桂川流ニ稱ノノぬる事な
り

又古来カスバル流ノノいふ外科有リこれハ寛
永二十年南部山田浦へ漂流ありノノ阿蘭船の
人数の内江戸へ招呼れとる中カスバル某ニ
いふ外科あり三四年留置れ其療法を學せら
れノノ者もありノノ追々長崎へ御送りのよ
江戸並ニ長崎ノノも正保の頃此カスバルノノ

蘭外 四 本 蔵

り傳來の療方ありしを詳なる事を知すとも
 後「カスバル」流と唱ふる事と申す事とや又
 別「カスバル」姓の外科渡來の事もありし
 此他長崎にて吉雄流と云へるハ其後渡來
 の蘭人より傳へ得たる療方も有て吉雄流と
 も申せり其諸家の傳書といふ者共を見るに
 皆膏藥油藥の法のみにて委しき事なり斯の
 如き類にて備らざる事のみなれとも其業ハ
 漢土の外科ハ大ニ勝り又本邦の古へより
 傳りたる外治ハ大ニ勝れりといふべき歟

其中ニ翁々見とる楢林家の金瘡の書と云ふ
 ものあり其中ニ人身中ニ「セイメン」といへる
 ものありこれハ生命ニあつたる大切のもの
 なりと記せり今を以て見れば是れ「ニュー」
 ふして神經と義譯せしものと思はる必つう
 なるらこれ程の事を聞書せしハ此書を始と
 すべし

一國初より前後西洋の事不付てハ志々ぐの事有て
 摠て嚴しく御制禁仰出されし事由へ渡海御免の
 阿蘭陀ふても其通用の横行の文字讀み書の事ハ

御禁止なるふより通詞の輩も只々と假名の書留
 等までふて口づから記憶して通辨の御用も辨せ
 して年月を經とり左ありし事なれハ誰一人横
 行の文字讀習ひ度といふ人もなかりし然
 るハ萬事其時至れハ自ら開け整ふものなる也ハ
 小也

有徳廟の御時長崎の阿蘭通詞西善三郎吉雄幸左
 衛門今一人何某名ハ忘れと云いふ人々申合て診せ
 してハ是まで通詞の家小て一切の御用向取扱は彼
 文字といふものを知らず只暗記の詞のミを以て

通辨し入組する数多の御用を渴く小辨して勤居
 ることハあまり小手薄き様なり何卒我々斗りも
 横文字を習ひ彼國書をもくむべき事御免許を蒙
 りなさいと小左あらば以來ハ萬事小付け事情明
 白小分り御用辨はるべき事ありて是迄の姿小
 てハ彼國人の偽り欺るる事ありて此れを糾明
 するの便りもなき事なりと三人いひ合て此次第
 を申立何卒御免許を下され度旨公へ願ひ奉り
 して御聞届れ至極尤の願筋なりとて速に御免を
 蒙りしとるなりこれぞ阿蘭陀渡來ありて後百年餘

小一て横文字學ふ事の始なるよりなり
 一去れ小よりて文字を習ひ覺る事出来西善三郎等
 先つコンストウールドといふ辞の書を和蘭人より
 借り得しを三通りして寫せしし和蘭人去れ
 を見て其精力小感し其書を直し西氏小典へしし
 一斯ありし事等自然達 上聞ける事見へ和蘭書
 と申もの是して御覽遊されし事なき者なり何なり
 ひとつ一本差し出候様 上意ありしより何
 の書なりしよや因入の本指出せしし御覽遊され
 去れハ因たより至て精密のものなり此内の所

説を讀得るならハ亦必ず委しき要用の事あるべ
 一江戸よても誰そ學ひ覺へるハ然るへしどの事
 不て初て御醫師野呂玄丈老御儒者青木文藏殿と
 の兩人へ蒙 仰候よりる去れより此兩人去の
 學を心うけられし然れども毎春一度づゝ拜礼
 不來る阿蘭陀人小付添ひ來る通詞ともより僅の
 滞留中聞給ふ事殊に繁雜寸暇もなき間の事なれ
 ハ一ミく學ひ給ふへき様もるし數年を重ね給ひ
 一事なれども漸くソレ日「マイン」月「ステル」星「
 一メル」天「アール」地「ンス」人「ラ」カ「龍」テ井ゲ

ル虎アロイムボーム 梅バムブース 竹と云ふ位の
 名より彼二十五字を書習ひ給へる事のミ存り然
 れとも是を江戸小て阿蘭陀事學ひ初め一濫觴を
 りき

一叔翁ヲ友豊前中津侯の医官前野良澤といへるも
 のあり此人幼小して孤となり其伯父淀侯の醫師
 官田全澤といふ人小養れて成り立ち一男なり此
 全澤博學の人なり一々天性奇人して萬事其好む
 所常人と異なるり一ふより其良澤を教育せ一所も
 又非常なり一とるり其教ふ人といふ者ハ世一廢

れんと思ふ藝能ハ學置て未とすても絶へざる様
 ふ一當時人のすてててとせぬ事とるり一をハ去
 れを為して世の為は後ハ其事の残る様とすへ一
 と教へられ一々如何様其教ふ遣ハす此良澤と
 いへる男も天然の奇士とてあり一なり専ら医業
 を勤と東洞の流信して其業を勤め遊藝とて世
 とすとり一いごよきん截を替古して其秘曲を極め又を
 ろくきハ猿若狂言の會ありと聞て去れも替古と
 通ひ一事もありとり如此奇を好む性なり一と
 り青木君の門に入て和蘭の横文字と其一二の國

語をも習ひしなり後著せる蘭訳筈といふもの
 ミ元く同藩の坂江鳴といふ隠士一日蘭書の残
 篇を良澤へ見せ去れハ読しけ解しへきものや
 さいひく是借り受てつく思ふ國異言殊
 るるさいへども同く人の志させくは扱去
 ららざる所のもよあらんや志させくは扱去
 れる取付へきの便なきを憾居たりこは扱去
 夫より不図青木先生此学は道給ふこは扱去
 其門に入りてふれを学ひ和蘭文字略考杯といふ
 著書を授り先生の学の識是ハ其頃青木先生長
 れる所をば聞書せりとなり
 崎より帰府の後の事と聞ゆ先生長崎へ行われ
 ハ延享の頃とやと思はる良澤の入門ハ宝暦の末
 明和の初年歳四十餘の時存りくは去れ医師にて
 常人の學へる始るるべし

一然れども其頃ハ常人の湯り横文字を取扱ふ事
 ハ遠慮せし事なりすては其頃本草家と呼ばれ後
 藤梨春といへる男和蘭事の見聞せしを書集め紅
 毛診といふ假名書の小冊を著し開板せし其内
 へ彼二十五文字を彫り入しを何方よりか咎を受
 け絶板となりたる去ともありしとそ
 一又其のち山形侯の醫師安富寄碩といふ者糊町に
 住たり此男長崎小遊學し彼地にて二十五文字を
 習ひ且つ其文字よていは四十七文字を綴り合
 せて認め賞ひ帰り人よ誇りて彼書籍も讀みつや

うふいひ觸らせしを翁杯も珍しき事と思ひたり
 同藩中川淳菴杯ハ鞠町日町宅にてありし此男
 より阿蘭陀文字を初て習ひしなり
 一翁兼て良澤ハ和蘭の事志ありや否ハ知らず久
 しき事にて年月ハ忘れたり明和の初年の事なり
 たり或る年の春恒例の如く拜礼して蘭人江戸
 へ來りし時良澤翁ハ宅へ訪ひ來れり去れし何
 方へ行給ふと問ひし今日ハ蘭人の客屋に參り
 道詞に逢ふて和蘭の事を聞き模様より蘭語杯
 も問ひ尋ねんとめなりといへり翁其頃いまだ

年若く客氣甚しく何事もうつり易き頃なれば願
 くハ我も同道に給れ共尋試とてしと申けれハ
 いと易き事なりとて同道して彼客屋に行きたり
 其年大道詞ハ西善三郎と申す者参りたり良澤引
 合せてしらくのよく中述とるよ善三郎聞てそれ
 ハ必ず御無用なり夫ハ何故と存れば彼辞を習ひ
 て理會するといふハ難き事なりとてハ湯水又
 酒を呑といふと問んとするは最初ハ手真似と
 て問ふより外の仕とハ存し酒をのむといふ事
 を問んとするは先づ茶碗にても持添へ注ぐ真似

をくつて口よつけて是ハと問へハう存づきて「デリ
 ンキ」ニ教也是れ即ちのむ事なり扱上戸ニ下戸ニ
 を問ふハ手真似ふて問ふべき仕方ニハ存くこ
 れハ数々吞むニ少々吞よて差別ニ有るなりされ
 とも多く吞ても酒を好よさる人あり又少々のミ
 ても好人あり是ハ情の上の事なれハ存すべき様
 なく扱其好き嗜むといふ事ハ「アインテレゲン」ニ
 いふなり我身通詞の家ニ生れ如より其事ニ馴居
 るら其辞の意何の訣といふ事を知らず年五十
 及んで此度の道中よて其意を始て解得たり「ア

イン」ニハ元向ふといふ「テレゲン」ニハ引事なり其
 向ひ引といふハ向ふのものを手前へ引寄るなり
 酒好む上戸といふも向ふの物を手前へ引度思ふ
 なり即ち好むの意なり又故郷を思ふも斯くいふ
 是又故郷を手元へ引よせ度と思ふ意あれハなり
 彼言語をさらし習ひ得んとするハ箇様ニ面倒
 なるものこして我輩常ニ阿蘭陀人ニ朝夕してす
 ら容易ニ調得く難く中々江戸存と小居れて學ん
 と思ひ給ふハ不叶事なり夫故野呂青木両君存と
 御用して年々此客館へ相越され一々さならす御

出精なれどもさうく御合点参らぬなり其元
 小も御無用の方然るべく異見くさり良澤ハ如
 何兼りハハ翁ハ性急の生れハ其説を尤聞き
 その如く面倒なる事をなく遂る氣根ハなく徒
 日月を費すハ無益なる事と思ひ敢て學ぶ心ハな
 くして歸りぬ

一其頃より世人何もなく彼國持渡りのものを奇珍
 とて搥て其舶來の珍器の類を好ミ少く好事
 きこえハ人ハ多くも少くも取聚て常ニ愛せざる
 ハなく殊ニ故の相良彦當路執政の頃より世の中

甚ど華美繁花の最中なりハより彼船よりウエ
 ールガラス「天氣」「テルモ」「ト」「寒暖」「ド」「ンドル」「ガ」
 ラス「震雷」「ホク」「ト」「メ」「ト」「水」「液」「輕重」「ド」「ン」「クル」「カ」
 ハル「暗室」「写」「フ」「ール」「ラン」「ター」「レ」「鏡」「現」「妖」「ゾ」「ン」「ガラ」
 ス「觀」「日」「ル」「イ」「ブル」「筒」「呼」「遠」「とい」「へる」「類」「種」「の」「器」「物」「を」
 年々持越其餘諸種の時計千里鏡ならひハ硝子細
 工物の類あげて数へらさるりハより人々其奇
 巧ハ甚と心を動ハ其窮理の微妙なるハ感服ハ自
 然と毎春拜礼の蘭人在府中ハ其容屋ハ夥く聚る
 やうなるりハ何れの年といふ去ハ忘れハ

明和四五年の間なるへーとせ甲必丹ハヤンカ
 ランス外科ハ「バブル」といふもの來りし事あり此
 「フランス」ハ博學の人「バブル」ハ外科巧者のよしを
 り大道詞吉雄幸左衛門ハ専ら此「バブル」を師とし
 とりと幸左衛門後幸作舞ハ耕牛と云りハ外科巧なること
 其名高く西國中國筋の人長崎へ下り其門に入る
 者至て多し此年ハ蘭人ハ附添來れり翁夫等の事
 を傳へ聞し由へ直し幸左衛門門に入り其術を
 學へり去れよふりて日々彼客屋へ通ひとり一日
 右の「バブル」川原元伯といへる醫生の舌疔を診ひ

て療治し且刺絡の術を施せしを見とり扱ふ手
 入りとるものなりき血の飛び出す程を預め考へ
 去れを受るの器を余程より引とるし置とるし飛透
 の血てうど其内より入りとりき是れ江戸にて刺絡
 せし始なり其頃翁年若く元氣ハ強し滞留中ハ
 怠慢なく容館へ往來せし幸左衛門一珍書を出
 し示せりこれハ去年初て持渡りし「ステル」石人
 の「ジュゼイン」外科といふ書なりと我深く懇望し
 て境樽貳拾挺を以て交易しとりと語れり去れを
 披き見ると其書説ハ一字一行も読む事能ハざれ

とも其諸図を見るに和漢の書に其趣大に異にして図の精妙なるを見ても心地開くへき趣もありよりて暫く其書をり受けせめて図をりりも摸し置へきと晝夜写しりり彼在留中其業を卒へとりこれよりて或ハ夜を去めて鶏鳴に及ひとりし事もありき

一又年ハ忘れとり一春々の幸左衛門阿蘭陀附添にて恭府せし頃豊前中津邸にて昌慶公の御母君御座内にて不慮に御脛を折傷し給ひし事あり貴人の事をれハ大騒ぎにて彼是醫師を御招きの死幸

ひに吉雄幸左衛門出府居合候事也へ直に御招きありて御療治被仰付御順快ありたり此時前野良澤御手醫師の事もへ懸合仰付られ格別懇意となりたり去れ等蘭学の世小開くへき一といふへ其後其主の供にて中津へ行くと候へ願ひ奉りて彼地へ下り専ら吉雄植林等に従ひて百日斗りも逗留し晝夜精一に蘭語を習ひ先は青木先生より學ひし類語と題せる書の諸言を本として復習訂正しなされし是に補ひて僅に七百餘言を習ひ得彼國の字跡文章等の事等も荒増し閱書して

持帰りし事ありたり此時ハハ蘭書も求めて帰
 府せり是れ長崎へ外治警古の為めならで彼書説
 學さんて参りし又の始めなり
 一和蘭ハ醫術並ひは諸々の技藝も精しき事と世
 にも漸く知り人氣何となく化せられ來れり此頃
 よりも専ら官醫の志ある方々ハ年々對話といふ
 事を願て彼客屋へもき療術方藥の事を問ひ給ひ又
 天文家の人も同く其家業の事を問ひ給へり當
 時ハ其人々の門人なれハ同道し給へる事も自由
 なり左あるより其方々の門人唱へ出入りもあ

りとり長崎ハ御常法ありて猥り又旅館への出入
 ハならぬ事なるは江戸ハ暫くの間事なれハ自
 然と構もなき姿なりき其頃平賀源内といふ浪人
 者あり此男業ハ本草家として生得て理よきとく敏
 才小してよく時の人氣よくなるひし生れなりき何
 れの年ありし右といふカランズといへる加比
 冊恭向の時なりし或る日彼客屋に人集り酒宴
 ありし時源内も其坐に列りありしカランズ戯
 け一つの袋を出し此口試し明け給ふへしあは
 ざる人は恭らすへしといへり其口ハ智慧の輪は

一とるものなり坐客次第は傳へきましく工夫すれ
 ども誰も聞き兼とり遂に末坐の源内に至れり源
 内大れを手に取り暫く考へ居りて下ち口を開き
 出せり坐客はいふ及ハす「カラン」も其才の敏
 捷なるは感し直に其袋を源内と興へたりこれ
 りして甚と親しき厚くなり其後ハとひく客屋へ
 至り物産の事を尋問へり又ある日「カラン」一つ
 の棋子の如き形の「スランガステーン」といふ物を
 出せし源内大れを見て其切用を問ひ帰り翌
 日別は新に一箇の物を作り出して持ち行き「カラン」

「ス」見せたり「カラン」是を見て大れハ前日見
 せし物と「カラン」は「ス」は「カラン」は「ス」
 是の品ハ貴國の産物又ハ外國にて求め給へ
 るものなりと問ふ大れハ印度の地方別意蘭と云
 ふ所にて求め來れりと答ふ源内又問て曰く其國
 にてハ如何なる所にて産するものといへハ「カラン」
 「ス」曰く其國にて傳る所ハ此物大蛇頭中より出る
 石なりといへり源内聞てそれハ左様ハあると
 一是ハ龍骨にて作りし物なるといふと云ふ「カラン」
 「ス」聞ていふ天地の間にて龍といふものハなき物な

り如何して其骨にて作るへいといへり是に於て
 源内已々故郷なる讃州小豆島より出せる大なる
 龍齒二つなきとる龍骨を出し示して是即ち龍骨
 なり本草綱目といへる漢土の書に蛇ハ皮を換へ
 龍ハ骨を換ふと説けり今我示す所の「スランガス
 テー」ンハ此龍骨にて作れる物なりといへり「カラ
 ンス」聞て大ひに驚き益其奇才に感しとる去れよ
 よりて本草綱目を求め右の龍骨を源内より貰ひ
 得て歸れり其返礼として「コン」ストンス「禽獸譜」
 ト「ニュー」ス生植本草「アンボイス」貝譜なといへる物

産家一益ある書物共を贈りたり是等の事も直對
 接話にて辨しとる事、あらず附き添はる内通
 詞部屋附なといへる者にて其情を通して辨せし
 去と小て一字一言通知せし去と小ハあらず其後
 源内彼地へ遊歴し蘭書蘭器なども求め來り且つ
 「エレキテル」といへる奇器を手小入れ歸府し其機
 用の事をも漸く工夫して遍く人を驚せり
 一此風右の如く成り行けとも西洋の事と通しとる
 といふ人もなかりしと只何となく此事遠慮する
 去ともなきやうななりとる蘭書杯所持する去と

御免といふ事ハなけれども間々所持する人もあ
る風俗に移り來れり同藩の醫中川淳庵ハ本草を
厚く好ミ和蘭物産の學亦も志ありて田村藍水同
西湖先生杯にも同志して毎春赤向せる阿蘭陀通
詞共の方亦も往來せり明和八年々のこの卯の春
りと覺へたり彼客屋へ至りて「ターヘルアナトミ
ア」ニ「カスパリウス・アナトミ」ニいふ身軀内景圖説
の書二本を取り出し來り望人あらハ由つるへ
といふ者ありて持帰り翁に見せたりもさう
一字もいむ事ハなされども臟腑骨節を以て

見聞する所ハ大ニ異なりて去れ必ず實驗して
圖説してゐるものニ知り何となく甚と懇望と思へ
り且つ吾家も従來阿蘭陀流の外科ニ唱ふる身を
れハせめて書筐の中にもそなへ置ききものと思
へり然れども其頃ハ家甚と窶なりて去れを
求むる力及ひざりしより我藩の大夫岡新
左衛門といへる人のもも持行きし頃の次第
なれハ此蘭書求め度と告り然れども力の足ら
ざるハ是非なりと語りしハ新左衛門聞きそれ
ハ求め置て用立つものゝ用立つものならハ價ハ

上より下へ置き置けるべき様取計ふへいといへり其
 時翁それハ必すいふ日當連ハおかけれども
 是非とも又用立つものにして御目よ掛くへい
 答へり傍は小倉小左衛門後青野と改むといふ男居たり
 一がそれハ何卒調へ遣さるへい杉田氏ハおれを
 空くする人ハあらすに助言一とり依之いこ心
 易く願も望の如く調ひ得たり是れ翁の蘭書手
 入りし始めなり

一板毎々平賀源内をこゝに出會く時又語り合へり逐
 々見聞する所和蘭実測究理の事共ハ驚入りし事

たつりなり若し直に彼國書を和解し見るならハ
 格別の利益を得る事ハ必せりされども是より其
 所又志を發する人のなきハ口惜き事なり何とそ
 此道を開くの道ハあるまじきや抑も江戸杯まで
 ハ及ぬ事なり長崎の通詞又託して讀み分けさせ
 度事なり一書よても其業成らハ大なる國益とも
 成るへいといふ其及ひがときを嘆息せしハ毎度の
 事なり然れども空しくおれを慨嘆するのこゝにて
 ありぬ

一然るに此節不思議に彼國解剖の書手に入りし事

南亭集 卷之十
二十
これハ先其國を実物ニ照シ見ときと思ひくニ実
小此學開くへきの時至りけるニや此春其書の手
ニ入りくハ不思議にも妙にも云んハ抑頃ハ三月
三日の夜ニ覺へたり時の町奉行曲淵甲斐守殿の
家士得能万兵衛といふ男より手紙もて知らせ越
せハ明日手醫師何某といへる者千住骨ヶ原ニ
テ腑分いとせるよりなり御望あらハ彼方へ罷り
越れよろくと言文を去りたり兼て同僚小杉玄適
といふハの其以前京師の山脇東洋先生の門ニ遊
び彼地ニ在り時先生の企ニテ觀臟の事ありくニ

此男ニ從ひ行て親しく視とるニ古人諸説皆空言
ふて信くるとき事のニなり上古ハ九臟ニ稱せり
今五臟六腑の目を令ちとるハ後人の杜撰なり
んといへる事の話もありく其時東洋先生臟志と
いふ著書をも出給ひたり翁其書をも見く上の事
なれハよき折あらハ翁も自ら觀臟してよと思ひ
居たりく此時和蘭解剖の書も初て手ニ入り事な
れハ照し視て何れハ其实否を試むへくと喜ひ一
うとならぬ幸の時至れりと彼地へ罷る心ニテ殊
ニ飛揚せり叔斯る幸を得り事を獨り見るべき事

ともあらず朋友の内にも家業も厚き同志の人々
 へハ知らせ遣ハ一同く視て業事の益もハ相互
 なるべきものと思ひ量りて先同僚中川淳菴を
 初某誰と知らせ遣ハせし中うも良澤へも知らせ
 越しとり扱良澤ハ翁よりも齡十をりも長し我
 よりハ老輩の事にてありし故相識も去をあれ常
 々ハ往來も稀に交接するなりしと醫事志篤
 きハ互ひふ知り合する中なれハ此一舉も漏すへ
 き人ともあらず先早く申通しとく思ひされとも
 さし掛りし事且つ此夜も蘭人滞留の折なれハ彼

客屋もありける由へ夜分もハなりぬ俄も知らず
 へき便りも存し如何せんも存せしが臨時の思付
 小て先手紙調へ知れる人の許し立寄り相謀りて
 本石町の木戸際も居たりし迂駕の者をやとひ申
 遣せしハ明朝よりこの事あり望あらハ早天も浅
 草三谷町出口の茶屋にて御越しあるへし翁も此
 処まで罷越し待合すへしと認め置捨てて帰れと
 持せ遣しけり

一其翌朝とく支度整ひ彼所も至りしは良澤恭り合
 其餘の朋友も皆々恭會し出迎たり時し良澤一つ

の蘭書を懐中より出し披き示して曰く去れハ是
 「ターヘル・アナトミア」といふ和蘭解剖の書なり先
 年長崎へ行きとりし時求め得て帰り家藏せしも
 のなりといふ去れを見れハ即ち翁ウ此頃手入
 りし蘭書と同書同版なり是れ誠ニ奇遇なりとて
 互ひし手をうちて感せり叔良澤長崎遊學の中彼
 地にて習得聞置しとて其書をひらき去れハ「ロン
 グ」として肺なり去れハ「バルト」として心なり「マーグ」
 といふハ胃なり「ミルト」といふハ脾なりと指し教へ
 とり然れとも漢説の図ハ似るへくもあらざれ

バ誰も直し見ざる内ハ心中よりいふやと思ひし
 去りてありき
 一去れより各打連立て骨ヶ原の設け置し觀臟の場
 へ至れり叔腑分の事ハ穢多の虎松といへるもの
 此事ハ功者のよしとて兼て約し置しよし此日も
 其者ヨ刀を下さすへしと定めたるヨその日其者
 俄ニ病氣のよしとて其祖父なりといふ老屠齡九
 十歳なりと云る者代りしして出たり健なる老者
 なりき彼奴ハ若きより腑分けハ度々手よりけ数
 人を解たりと語りぬ其日より前迄の腑分といへ

るハ穢多し任せ彼々某所をさして肺をりて教へ
 去れハ腎をりて切り分け示せり夫を行き視し又
 之看通して帰り我々ハ直に内景を見究めしなり
 いひくまての事よてありしなり固より臟腑は
 其名の書記してあるものならねハ屠者の指し示
 すを視て落着せしむるよて其頃まてのならひを
 るよしなり其日も彼老屠り彼れの此れのみ指し
 示し心肝膽胃の外は其名なきものをさして名ハ
 知らねども已れ若きより数人を手よりけ解き分
 けし何れの腹内を見ても此処よりやうの物あ

りうくこよ此物ありと示し見せたり圖よりて
 考れハ後ハ分明を得し動血脈の二幹又小腎など
 よてありたり老屠又曰只今よて臍今の度々其醫
 師々よよ品々をさし示しこれとも誰一人某ハ何
 此ハ何々なりと疑れハ御方もなうりといへり
 良澤相俱し携ひ行し和蘭圖は照し合せ見しよ一
 こくといさく違ふ事をき品々なり古來醫經よ
 説する所の肺の六葉兩耳肝の左三葉右四葉など
 いへる分ちもなく腸胃の位置形状も大よ古説と
 異なる官醫岡田養仙老藤本立泉老などハ其大なる

まて七八度も腑分給ひ由なれども皆千古の
 説と違ひ一毎度々々疑惑して不審開けず其
 度々異状と見しものを写し置れつらく思へハ
 華夷人物違ありやなと著述せられし書を見さる
 事もありハ去れう為なるへし扱其日の解剖事
 終りとももの事は骨骸の形をも見るへしと刑場
 野さらしなり骨共を拾ひとりてかざく見
 しと舊説とハ相違しして只和蘭圖は差へる所を
 きは皆驚嘆せるのとなり
 其日の刑屍ハ五十歳もりの老婦とて大罪

を犯せし者のより元京都生れとてあど名を
 青茶婆と呼れしものこと
 一 帰路ハ良澤淳庵と翁と三人同行なり途中とて語
 り合しハ叔々今日の実験一々驚入且去れとて心
 付ざるハ耻べき事なり荀も賢の業を以て互に主
 君々々へ仕る身として其術の基本とすへき吾人
 の形骸の真形をも知らず今迄一日々々此業を
 勤め来りしハ面目もなき次第なり何とぞ此実験
 本つき大元も身骸の真理を辨へて賢をなき
 ハ此業を以て天地間身を立てるの申訳もあるへ

一と共くは嘆息せり良澤もげは尤千萬同情の事
 なりとの感ぬ其時翁申せしハ何とぞ此「タ」フル
 アナトミアの一部新しは翻譯せば身軀内外の事
 分明を得今日療治の上の大益あるへいいうも
 して通詞等の手をくらす讀み分けときものなり
 と語りしは良澤曰く予ハ年来蘭書よみ出く度の
 宿願あれど去れは志を同くするの良友なり常々
 去れを慨し思ふのこよて日を送れり答うと跡去
 れを欲し給ハ我前の年長崎へもゆき蘭語も少
 くハ記憶し居れりそれを種とて共くよみ撰る

べしやといひけるを聞それハ先づ喜ハしき去り
 たり同志よ力を戮せ給らハ憤然として志を立て
 一精出し見中さんと答へたり良澤去れを聞き悦
 喜斜ららす然らハ善ハいそげといへる俗説もあ
 り直は明日私宅へ會し給へうし如何やうとも工
 夫あるへいと深く契約して其日ハ各々宿所へ
 へ別れ帰りたり
 一其翌日良澤の宅に集り前日の去りを語り合ひ先
 つ彼「タ」フル「ア」の書よりち向ひし誠
 又艦航なき船の大海に架出せし如く茫洋と

て寄へきなく只あきれはあきれ居る迄なり
 されども良澤ハ兼てより此事を心は掛け長崎迄
 もゆき蘭語並ひは章句語脈の間の事も少くハ聞
 覚へ因ならひ一人といひ齡も翁なごよりハ十年
 の長よりハ老輩なれハ去れを盟主と定め先生と
 も仰く事となごぬ翁ハいまと二十五字さへ習ハ
 才不意と思ひ立し事なれハ漸くハ文字を覚へ彼
 諸言をもならひしと成り
 一扱此書をよと始るは如何様とて筆を立へし
 談し合しは迎も始より内象の事ハ知れかざる

べし此書の最初は仰伏全象の図あり去れハ表部
 外象の事なり其名起ハ皆知れとる事なれハ其図
 と説の符號を合せ考ふる去とハ取付きやするへ
 し圖の初とハいひうとく先つ去れより筆を取り
 初むへしと定めとり即解體新書形跡名目篇去れ
 たり其去るハ「テ」の「ト」の又「アルスウェル」等の助
 語の類も何れも何やら心は落付て辨へぬ事也へ
 少しつゝハ記臆せし語ありても前後一向にマウ
 らぬ事もつらなり譬へハ眉といふものハ目の上
 へ生しとる毛なりと有るやうなる一句紡縛し

て長き日の春の一日は明らめられず日暮る迄
考へ詰め互はふらま合て僅一二寸の文章一行も
解く得る事ならぬとて有りたり又或る日
鼻の鼻とて「ブルヘツヘンド」せしものなりとあるは
至りしは此語よりす是は如何なる事とてある
へきと考合しといふ小もせんやうなく其頃「ウオ
ルデインブック」釋辭といふものもなきやうやく長崎
より良澤求め帰りし簡略なる一小冊ありしを見
合するは「ブルヘツヘンド」の釋註は木の枝を断ちと
る迹其迹「ブルヘツヘンド」をなく又庭を掃除すれは

其塵土聚り「ブルヘツヘンド」すといふ様より出せ
り去れは如何なる意味なるへし又例の去り
去りつけ考ひ合ふは辨へ兼とり時は翁思ふは木
の枝を断りし跡愈れは堆くあり又掃除して塵
土あつまれは去れもろづとなくなるなり鼻ハ面
中は在りて堆起せるものなれは「ブルヘツヘンド」
ハ堆といふ去りなるべし然れは此語ハ堆と譯し
てハ如何といひけれは各去れを閱て甚と尤なり
堆と譯さハ正當すへしと決定せり其時のうれし
さハ何よとへんうとなく連城の玉をも得し

心地せり如此事にて推て訳語を定めり其数も次第々々増しゆく事となり良澤のすては賞居し譯語書首をも増補しけるなり其中にも「精神」なりといへる事出し至てハ一向に思慮の及ひがとき事も多うりしとれらハ亦往々ハ可解時も出来ぬへし先つ符號を付置へしにて丸の内は十文字を引きて記し置たり其項不知をハ書十文字と名けたり毎會いろくは申合せ考へ案しても解すへうらさる事あれハ其苦さの餘りそれも又くつは十文字くし申たりき然れども為すへき事

ハ固より入は在り成るへきハ天はありの喻の如くなるへし如此思ひを旁に精を研り辛苦せしと一ヶ月は六七會なり其定日ハ怠りなくしけもなくして各相集り會議して讀合ひしは実し不昧者ハ心とゆらよて凡一年餘過ぬれハ譯語も漸く増し讀は随ひ自然に彼國の事態も了解する様よて後ハ其章句の疎きハ一日は十行も其餘も格別の苦勞なく解し得るやうにもなりたり尤毎春赤向の通詞どもへも閑亂せし事あり又其間ハ解屍の事もあり亦獸畜を解きて見合せし

事も度々のたとなりき

蘭學事始上巻終

陸侯氏日記

